Photographic Society of
Zone System

ゾーン・システム研究会会報
発行日：2002.10
発行者：中島 秀雄
事務局：内田順
編集部：荒井 崇

NO.23

CONTENTS

・Mono Inn でのひと時
(ｱﾝｾﾙ･ｱﾀﾞﾑｽの孫、ｻﾗ･ｱﾀﾞﾑｽとの出会い)
・ｱﾝｾﾙ･ｱﾀﾞﾑｽ生誕１００年写真展鑑賞会
・ウィズナー木製カメラの行方
・ポラロイド講習会レポート
・Information

Mono Inn でのひと時

(ｱﾝｾﾙ･ｱﾀﾞﾑｽの孫、ｻﾗ･ｱﾀﾞﾑｽとの出会い)

中島秀雄

我々は、今日一日、高さ 9000 フィートのシエラの峠まで車で上り、エリー・レイクやタイオガ・レイク、そして、レンバートロックの岩山や林をモチーフにシエラの大自然にカメラを向けてきた。光線は強く、決してベストな光とはいえないが、それでもシエラの雄大な自然とその広大なスケールに、それぞれに美を求めてシャッターを切ってきた。

米国に来て今日で 5 日目、時差、睡眠不足、そして、高度差により、我々はいくらかくたびれ腹も減り、この日は早めに切り上げることにした。

夕食は昨日入ったモノ湖の傍らにある小さなレストランに決めたが、そこはあいにく満席で、ウェイターは数マイル先にあるレストラン“モノ・イン”を奨めてくれた。“そこなら 7 人入れるだろう、もし満席で戻るなら予約しておく”と彼は言った。

レストラン・モノ・インは、私が以前から入ってみたいと思っていたところ。しかし、毎回 close されていて時間が合わなかった。

モノ・インとはアンセル・アダムスが生前ロケーションなどに使っていた湖の際の山小屋で、現

在はアンセル・アダムスの息子マイケルの令嬢サラ・アダムスが所有している。インと言うからには以前は宿屋も兼ねていたのかもしれないが、現在はレストランとバーになっている。そうであるならぜひ一度入ってみたいと思っていた。

Mono Inn の場所はすでに分かっていた。コンウェイサミットの丘に向かって 395 号線をモノレイクに沿って一直線に走る道路際にあり、アイボリーの壁に赤い屋根が小さなロツジにも見えた。周囲は低い灌木の荒地がモノレイクに沿って延々と続き、遠くに家が一軒見えるだけでほかには何もなく、どこに家を建てようと誰も文句は言わないまったく自由な空間に見えた。

ガラス格子の扉を開けると、正面にアダムスの写真と、見たこともないセピア色の写真が何点かあった。そして、その先にもう一つ扉があり、私はそこがレストランの入り口だろうと思った。しかし、そこは椅子やソファーを備えたギャラリーになっていて、ダイニングでのテーブルセットができるまで、客はこの部屋で待つようになっているのだろうと想像した。中に入って始めて、写真家アンセル・アダムスと関係のある建物だと分かるようになっていた。そして、ギャラリーの大きな窓越しにモノレイクが見えることから、この建物は、外からガラスを通して一直線にモノレイク

が見える建築横造になっていた。

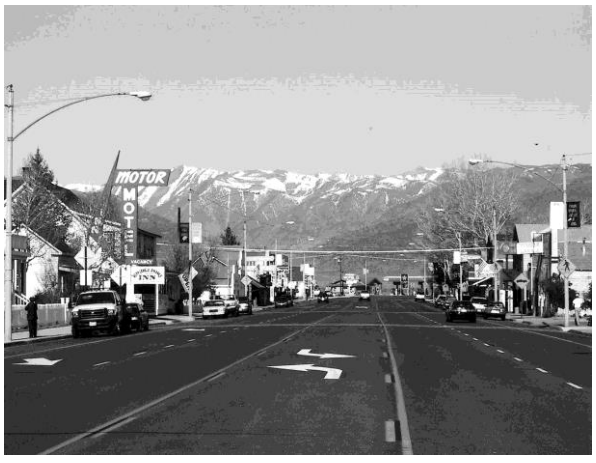
話し声は下の方から聞こえてきた。声に向かって階段を降りると、3 組の客がテーブルを囲んで話しをしていた。照明の光と外の光が交じり合い、ワイングラスやテーブルセットが微妙な色に見えた。片隅には民芸家具が並び、大きなガラス窓の遥か先には、銀色に光るモノレイクと山並みが見えた。もし断られても、見たことの経験だけは記憶しておきたいという気持ちがあった。

黒のパンツスタイルに長めの髪を束ねた長身の女性が笑顔で迎えてくれた。彼女は電話を指さし“予約していますか。”日本から写真を撮りに来たアマチュアの写真家で、東京でマイケル・アダムスに会いこの店を知った。と私は思い切ってしゃべってみた。彼女は驚き、笑顔で、“彼は私の父です。”サラ・アダムスがマイケル・アダムスの娘であることはうすうす分かっていたから、彼女がどんな反応をするか分かっていた。しかし、目前の女性がサラ・アダムスだという確信は半々だった。違ったとしても、マイケルの名前を言えば我々との距離は縮まると思った。確実に距離は縮まり、私は、多少興奮して東京でマイケルに会って話しをしたこと、6 人の仲間はゾーンシステムを運用して写真を撮っていること、秋に展覧会を予定していてそのための撮影であることを告げた。

“私もモノクロームが好きです。”サラは快く我々を向かえテーブルをセットしてくれた。7 人もの突然の客のためにはテーブルが二つ必要で、サラはどこにセットしようか迷っていた。他の 6 人は一向に降りてくる気配はなかったが、かえって私は安心した。登山靴に作業着の我々がいきなりどたどた降りてきたら、他の客にさぞ迷惑だったろう。

手前にバーカウンターとグランドピアノがあり、窓側がダイニングルームになっていて、二つの空間の仕切りには、ボートを漕ぐときに使う櫓が装飾を兼ねて使われていた。ここがかつて遊覧用のボートや工具の倉庫だったのだろうと想像させた。道路から見れば地下室で、天井は低く、仕上げも粗雑で太い梁がむき出しになっている。天井と柱をつなぐ金具も単純なボルトで止められている。しかし、それらが返ってナチュラルなインテリアデザインにもなっている。レースのカーテンや薄いグレーの壁、テーブルにセットされたワイングラスとテーブルワイヤーとの調和はアメリカの感性そのもので、彼らの色彩感覚とプレゼンテーションを見るのはいつも愉しい。石を組み上げた暖炉にまだ新しい灰が残っていて、いつでも火が入るようになっていた。

サラから準備 OK のサインをもらい、私は、他の面々に静かに降りてくるように合図を送った。



席に着き、しばらくして、私は山下氏に促されてトイレにいってみた。重い扉を開けると、そこは 4 メートル四方もある空間になっていて、その片隅に真っ白な便器が置かれていた。壁にはアダムスの写真が展示され、冷静に写真を見る場にもなっている。私には真っ白な便器が ZoneⅧにさえ見えた。何と贅沢な空間なのか。要するに徹底しているのだ。アダムスが生み出した写真哲学を認め、愛し、それを実践している。この建物すべてが、アダムスの精神性で貫かれている。そう感じた。

ヨセミテにあるアダムスギャラリーでは感じられない新しい経験だった。

このとき、私は、いつかアダムスの自宅兼暗室を訪ねてみたいという思いが強くなっていた。

我々は肉、魚、サラダ、そしてワインやビールを注文した。資料によるとフェルナンド・マドリゲルがコック長でアメリカ南西部の料理だと書かれていた。料理の味は十分なものだった。我々は、今日一日の撮影成果を語り合った。

食後、我々は正面のガラス戸を開けて外に出た。湖はここからまだ相当距離があり、低い灌木がなだらかに湖まで続いていた。湖水には毒があって魚は棲まないと土産物屋の主人が言っていた。そういえば釣り人はいないし、ボートやヨットそして桟橋などもまったく見えない。対岸まではおよそ 25 キロあるが、ひょっとしたら人間の手がまったく入らない太古から続く巨大な湖なのかもしれないと想像すると鳥肌が立った。水際には岩塩のような白い砂のラインと岩山がいくつも見え、かつてそのラインまで水があって、毎年乾燥によって後退していく水の年輪のようにも見えた。しかし、この乾燥と蒸発の繰り返しが時にすばらしい巻き雲を作り、多くの人を興奮させ、すばらしい写真がたくさん生まれている。

8 時に近いとはいえまだ明るく、暮れかけた空には穏やかな雲が流れ、ここだけ時間が分単位で引き延ばされているようにも感じた。昼間の撮影に集中していたときの興奮など、今はどこにもなかった。

私はサラに支払いを済ませ、機会があったらまた来る。会えてうれしかったことを伝えた。彼女は私に握手を求め、名刺がほしいと言ってきた。

我々は、偶然にもこうしてアンセル・アダムスの孫に会うことができたのだ。

一階のギャラリーに集合して記念写真を撮った。ソファーやチェアー、そして、柔らかい照明のある、落ち着いたプライベイト・ギャラリーになっていて、アダムスの代表作品にまじって見たこともない作品が展示してあり、ここだけでしか見ることが出来ない作品なのかもしれないと思った。私は、なぜかアダムスの作品に集中できなかった。アメリカ人の写真に対する尊敬の念に嫉妬していたのかもしれない。アダムスが写真をアートにまで高めた功績は大きいものがあるに違いないが、写真を理解し愛した多くの人々がいたことも事実だろう。

広大なモノ湖の片隅の小さなレストラン、中に入って見なければここにギャラリーがあることすら分からない。入り口の壁には A4 のペーパーに、オープンは 5 月－10 月、5 時－10 時となっ

ていて、プライベートパーティー、宴会、ウエディング、ワーク・ショップのイベントが可能とタイプされていた。ただし、ヨセミテ公園にあるアダムスギャラリーにはちゃんとモノ・インのパンフレットが置いてあり、観光客にはここが分かるようになっていて、それで十分やっていけるのだろう。

一軒のレストランに断られたことが、まったく予定になかったすばらしい経験になった。撮影が優先の我々の旅は、そのときにならなければ次の行動は分からない場合が多い。時間の割り振りが曖昧な旅であればこそ、時にはすばらしい経験をもたらしてくれるものだと実感した。

7／25／02

ｱﾝｾﾙ･ｱﾀﾞﾑｽ生誕100年写真展鑑賞会

荒井崇

2002 年 5 月 1 日、東京写真文化館にて、アンセル・アダムス生誕 100 年写真展鑑賞会が行われた。今回は、中島先生及び、東京写真文化館学芸員篠原氏の解説を交えて、アダムスの作品を十分に堪能。会員にとって、大変有意義な時間となった。

本展覧会はアダムス生誕 100 年を記念し、東京写真文化館のコレクションに加え、第二次大戦下におけるマンザナー日系人収容所を撮影した写真も展示された。

当時アダムスには日系の友人がいて、収容所に関してはとても心を痛めていたと言われている。写真家として何かできることは無いかと思い、写真を撮り、写真集を制作したという。３５mm カメラで撮影すると感情に流されてしまうと考え、あえて８×１０カメラで撮影したとのこと。

次に、今回中島先生に解説していただいた主な作品について、以下紹介する。

１．Clearing Winter Storm

このイメージは、アダムスの有名なヨセミテインスピレーションポイントでの１枚だ。フィルタ

Clearing Winter Storm

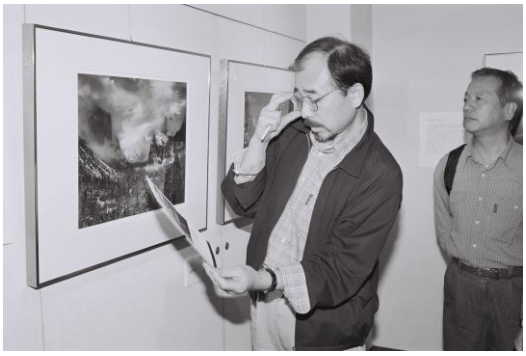
Monolith

ーはラッテン No.8（薄黄色）、フィルム現像は＋１、引き伸ばしレンズは何と６００mm を使ったという。中島先生いわく、引き伸ばしのディスタンスを大きくとりたかったのではないかとのこと。印画紙現像はセレクトールソフトとデクトールの混合液を使用し、係数現像法を用いていた。係数現像とは、現像液が疲労していく分を補正する手法だ。最初に画像が出てからの現像時間を管理するもので、現像液が疲労した分、所定の係数を掛けて現像時間を決定する。アダムスの手法は全てにおいてシステマチックといえる。

２．Monolith

アダムス 25 歳のときの作品。この作品を撮影

Moonrise, Hernandez



することにてよって、アダムスは pre visualize という概念に気付いた。赤フィルターを用いたこの作品が、ゾーンシステムの基礎となったそうである。

３．Moonrise, Hernandez

言わずと知れた有名な月のイメージである。このとき何とアダムスは露出計を忘れたとう。経験により月の輝度を 250cd/ft であると仮定し、この輝度をゾーンⅦにおいて露出を決定したそうである。常日頃、ゾーンシステムを駆使した撮影の経験が、この作品を救ったのではないだろうか。筆者はそう感じた次第である。

ウィズナー木製カメラの行方

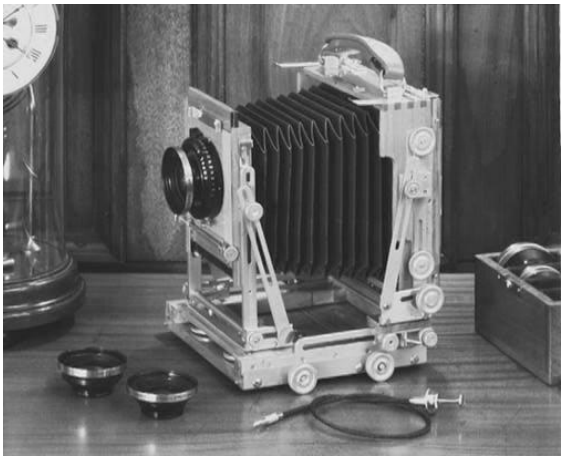
中島秀雄

米国撮影を前にして、撮影カメラに迷いを感じていた。ボーディでの撮影に、いつもの使い慣れたカメラは十分機能しないことは分かっていたからだ。何かいいカメラがないかインターネットを使って探していたとき、米国ウィズナー社の新製品に目がとまった。変わった機構の付いたデザインで、これなら目的に合うかもしれないと思いプリントアウトして検証し、いつ発売になるのか必要事項を記入してパソコンを閉じた。翌日、日本ポラロイド社から電話が入った。「サンプルカメラが当社にあり、いつでも見ることが出来る」日本ポラロイド社がウィズナーの代理店になることはそのとき知った。私はすぐにポラロイド社に出向き、サンプルカメラを見せてもらった。私はいくつかの企画を提示してカメラを借りることにした。これがきっかけとなり、日本ポラロイド社と研究会は関係を深めることができ、ロナルド・ウイズナー社長自らカメラ紹介のために我々のところにやってきた。

ガラス越しに撮影したい

ゴーストタウン・ボーディにある建物の大部分は鍵が掛けられ、内部にカメラを持ち込むことはできない。それでも内部を撮りたいと思ったら、歪んだガラス越しに撮るしかない。ガラスの内側には 19 世紀の息吹がそのままに、“閉じられた時間”を垣間見ることができると私は思っていた。これを何としても撮りたいと思っていた。

ガラス越しに撮影するにはちょっとしたコツがあり、私はいつもフォーカシングクロスを使って反射を防ぐようにしている。しかし、反射が大きすぎて十分にカバー出来ない場合もあるし、目的の被写体内部が暗くなってしまう場合もある。



それらの欠点をできるだけ排除して撮影するには、レンズを窓ガラスにピツタリつけるのがよい。そのことは前から分かっていた、が、私のカメラはそう出来ない一つの欠点があった。ワイドレンズをつけてピント合わせをすると、カメラの両脇から二本のレールが繰り出てガラスに接触し、それ以上レンズをガラス面に近づけることが出来ないのだ。

日本ポラロイド社と木製カメラ？

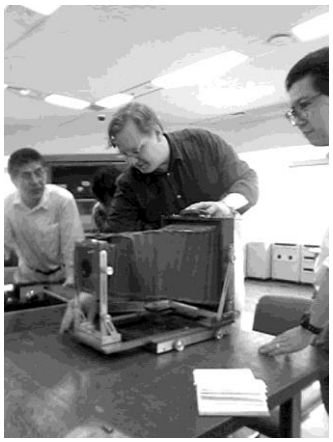
ポラロイド社はデジタル化に直接シフト出来ない事情もある。また、莫大な投資によって作り上げてきたシステムをこれからも運用していくことでデジタルの世界との違いを見せ、その特性を維持していける自信もあるようだ。また、ポラロイドの用途は多方面に広がり、我々のような純粋な写真表現に使っているのはほんのわずかにすぎないようだ。医学や実験室で使われているポラロイドシステムを一気にデジタル化するには大変な経費がかかり、医学界もしばらくは今までのシステムで行くようだ。このことは、私が病院取材のとき、医者から直接聞いたことがある。

ポラロイド社がなぜ木製カメラに興味をもったのか、担当者からたっぷりと聞かされた。今までポラロイドが進めて来た写真システムが徐々

に電子化の方向に進み、科学と化学を介して手作りの写真システムが消えていく中に、より手作り製品を扱いたいという新しい企画が立ち上がったことがきっかけのようだ。それがなぜ木製カメラなのかは、私が研究会の中で事あるごとに木製カメラの利点を述べていることと大きな違いはなかった。木製の美しさ、手づくりの暖かさ、軽さ、いつまでも飽きがこない等。そして、ウィズナー社は外国にも代理店を置きたいというタイミングもあったようだ。
ただ、ポラロイド社は「ネガはポラロイドで作り、プリントはデジタル処理でもいい」と考えていて、したたかさも見えた。

ニュー・ポケット・エキスペディション

多少塗りムラはあるものの木地にたっぷりとニスが塗られ、ジュラルミンにメッキした金色とワインレッドの蛇腹が、私にはヨーロピアン・クラシックな甘みを感じた。しかし、構造は複雑で、組み立てにも時間がかかり、はたしてこれがリジットの位置なのか担当者にもまだよく飲み込めていなかった。私は、今まで見たこともない機構にうっかり手も出せず、仕掛け時計の内部を見ているように感じた。



Wisner 社ｵｰﾅｰ
(研究会例会にて 2002.06.08)

そして、日本を発つ一週間前にポラロイド社からカメラが届き、さっそくテスト撮影に入った。組み立てや収納はやはり複雑で、設計した本人にしか分からないほど部品点数、稼動部分が多く、一週間でとにかく慣れるしかないと思った。

カメラ機構

このカメラの特徴は、コンパクトにして軽く、暗箱カメラとしての必要な機能はすべて整っている。カメラ本体は桜材を使い、金属部分はエアクラフト・アルミニュウム（ジュラルミン？）、ネジや歯車には真鍮が使われている。標準は赤蛇腹になっているが、黒もある。素材は羊皮で裏地は布で補強されている。

大きな特徴

1. フロント部分に歯車による独立したライズ・フォール機構がある。
2. バック部分のライズ・フォールが可能。
3. バック部分が単独に前方に移動可能。
   （この機構が私は大変気に入った）
4. バック部分のセンターアオリが可能

＊ライズ・フォールは従来フロント部分を上下して行っているが、フロントをいじるとせっかく合わせた垂直線がくずれてしまうことがよくある。また、ワイドレンズを装着すると蛇腹は収縮し、この状態でライズ・フォールすると蛇腹にストレスをかけてしまう。このカメラはレンズ部だけ単独に歯車を介してライズ・フォールすることが出来るようになっていて、垂直線をくずことなく、また、蛇腹にストレスをかけることなくライズ・フォール出来るようになっている。ただ後ろ玉の大きなレンズの場合には限界があり、フロント部分全体をライズ・フォールする必要があるだろう。

＊バック部分のライズ・フォールは建築写真を仕

事とする私は常用している。フロント部分が十分稼動すれば、バック部分を動かすこともないが、ピントグラスを見ながら調整する場合、バック部分によるライズ・フォールの方が楽なのだ。このカメラには、バック部分のライズ・フォールがシンプルな構造で着いているのがありがたい。

＊木製カメラの多くは、ワイドレンズを装着した場合バック部分を前進させるか、フロント部分を後退させて対応する。しかし、こうするとカメラの機構上多くのカメラはベット部分や繰り出したレールによるケラレの心配がでてくる。
このカメラは、バック部分が単独に歯車を介して前方に移動できるようになっていて、前方にレールが出ることもなく、ワイドレンズ使用時には大変有利な機構になっている。この機構は本当にグッドアイディアで、窓ガラスにレンズがピタリつけることが出来る。私はここに強い関心をもった。実践の中から出できた設計者の知恵だと思った。

＊センターアオリは光軸の移動がなく、アオリのたびにフレーミング調整することもない。この機構をシンプルにバック部分につけたところがすごい。

従来の廉価版木製カメラは、ライズ、フォール、ティルト、シフト、スイングの基本的な機構によって作られていて、一部の高級木製カメラを除いては上記した 4 項目の機能は省かれている。稼動部分が増えるとそれだけコストは高くなり、また、堅牢さに影響してくるからだ。新製品のスペシャル・エキスペディションは贅沢な機構が満載されていてフィールドカメラの集大成とでも言える。これだけの稼動部分があると堅牢さに影響すると思うが、ネジを締めるとガタは感じられないし、それでいて、重さはおよそ 1．6Kg しかない。フィールドカメラ全般が軽量化の方向にあり、このことは大型カメラの使用を日常化しやすい。35 ミリのニコン F5 は 1.2Kg で電池を入れると重さは同じ位だ。

使ってみての印象

米国へ出発一週間前にカメラが届いた。折りたたまれたカメラにズレがあり、完全なクローズ状態ではなかった。慣れないせいか、組み立てにも時間がかかり、デリケートな操作を必要とした。いつものように直角に起こし、緩んだネジを締め、フロント部分も垂直に起こしてネジを締めるが、いったいどの状態がリジットなのか決断できない。というより、どのようにもリジットになる設計になっているといった方が正確なのかもしれない。使っていく内に自分にとって使いやすい位置がリジットになると理解した方がいいかもしれない。これは設計者に一度位置決めしてもらうしかないと感じた。収納するときも、今まで経験したことのないデリケートな操作を必要とした。それはフロントフレームに近い蛇腹のサイズがフロントフレームより少し大きく、折りたたんで収納するとき蛇腹が木製フレームと金属に挟まれて、蛇腹に穴を開けてしまいかねないと思った。これは収納時に蛇腹を少し引っ張って収納することで解決はついた。

中判カメラ用の三脚に付けて外に運び出すと実に軽く、今までの半分しかないと思った。ブローニーカメラの感覚で 4X5 撮影可能だ。フロントのギアによるライズ・フォールは便利だが、そのためにコストがかかるなら、なくてもよいと思った。ギアがなくても手動でもいいし、その方がシンプルで手早いと感じた。デイアドルフは手動になっている。また収納時にこのギアが引っかか

り、ギアそのものにそれほど大きなメリットはないと思った。バックのライズ・フォールは必要なとき効力を発揮しそうに感じた。

本機の大きな特徴の一つ、バック部分が単独で前方に移動できる機構は大変気にいった。フロントフレームはそのままに、バックが前方に移動できるとワイドレンズが容易に使える。フロントフレームを後退させてワイドレンズを着けると、ベース部分でのケラレが気になる。実際、私のカメラは 120mm レンズを着けたときは、フロントフレームを後退させベット部分のケラレを気にしながら使っている。90mm レンズを着けたときはフロントフレームを折り曲げて、装着し、そのときライズ・フォールをしようものなら、リジットがすぐにくずれてしまいいつも困っている。

このカメラの優れた点は、バック部分を前進させ、ワイドレンズの装着を容易にし、ライズ・フォールを単独で行える機構にしたことで蛇腹に負担をかけず、リジットをくずすことのなく操作できる機構を有していることだろう。

テスト撮影

最後に光線漏れのテストをした。シャッターを閉じ、引き蓋を引いて、60 分と 30 分光りにさらした。結果は残念ながら両方とも全面にかぶりを起こしていて、このままでは使えないと思った。ためしに私のカメラで同じことをやってみたが、60 分の方はフィルムの上方にわずかに光線引きがあるが、画面にまったく影響はなかった。どこから滴れるのかバックをはずして蛇腹に目をやると、テヒニカボードを取り付けるために作ったプラスチックアダプターの隙間と、ライズ・フォールの稼動部分の隙間から明らかに光が入っていた。それと、蛇腹にピンホールが開いていた。本来は専用の木製レンズボードを使うことが前提であるので、これを使えばレンズボードからの光漏れはクリヤーできるが、我々は常にテヒニカボードを使うことから、フロント部分をテヒニカ専用に開口すればこれもクリヤーできるだろう。

ライズ・フォール部分の光漏れは遮光布（テレンプ）が不完全で、ここは改良の余地ありと思う。

デザインとしての美しさ、カメラとしての十分な機能、軽く堅牢さもあって大げさに言えば次世代に向けてのカメラのようにも思えた。しかし、まだ試作品の域を出ていないとも感じた。個人的に言えば、フロント部分に付いた単独のライズ・フォールはなくてもよいし、バック部分のセンターアオリもなくてよいと感じた。それだけでずいぶんシンプルになり、操作に迷いがなくなり、コストも下げられるだろう。要は機能が充分で使いやすく、堅牢で軽く美しい木製カメラが求められていて、多少コストが高くても好まれるカメラになることだろう。

早く試作の段階から実践の段階へと進んでほしい。

先日、日本ポラロイド社から連絡があり、製品が完成し第一号が売れたそうです。この記事が掲載されるころには、完成品を見ることができるでしょう。

次のページは、ウィズナー社カメラの仕様です。参考にしてください。

（ウィズナー社ホームページより）

http://www.wisner.com/Page11.html

The New Pocket Expedition Series *Fully Geared*

These cameras are the ultimate in field cameras. Made in natural or black varnished cherry, and silver, black or brass anodized aircraft aluminum (see insets), these remarkable cameras are even smaller and lighter than the standard Expedition cameras. **In this model we have put the patented geared axis tilt on the front standard as well as the rear.** Geared front rise and fall has also been provided, making the bag bellows less often required when using short lenses. This camera also has "top rear focus" with short lenses in mind, allowing the photographer to bring the rear standard forward on its rails, close to the front standard, independent of its normal rear focus. This camera is not short changed in extension, either, having more than 19.5 inches (5x7 has 25 inches, 8x10 has 35 inches). But best of all, the Pocket Expedition weighs only 3.6 lbs. (5x7 is 4.75 lbs, 8x10 only 9.5 lbs) This camera is for the photographer seriously interested in the greatest capabilities for the least weight.

4x5....$2495 5x7....$3195 8x10....$4195

"...beautifully made... this camera offers everything the photographer could want. More features and lighter weight." View Camera Magazine, Jan/Feb 1998

"of all the cameras I've owned I like my Wisner Pocket Expediton 8x10 the best It is tough, light, friendly and beautiful" Nicholas Nixon, 5/27/99

- Front Geared AxisTilt
  …New, Wisner Patent 20 degrees
- Front axis tilt, manual
  …limited only by bellows
- Front base tilt
  …45 degrees forward
- Front swing
  …12 left/12 right of center
- Front shift
  …1/2″ left/1/2″ right of center
- Geared Front Rise & Fall
  … New, 1.25″ (31mm)
- Front rise, manual
  … 1.5 (38mm)
- Front fall, manual
  …1.25 (31mm)
- Combined front Rise or Fall
  …2″ (50mm)
- Rear geared axis tilt, Wisner Patent
  …25 degrees backward
- Rear base tilt
  …20 backward
- Rear swing
  …15 left/15 right
- Rear Parallel Rise, Wisner Patent
  …1 1/2″ (38.10mm)
- Combined axis and base tilt
  …45 degrees
- Minimum focus, normal bellows
  …58mm
- Maximum focus, normal bellows
  …19″ (480mm)
- Minimum focus, bag bellows
  …0mm
- Maximum focus, bag bellows
  …6″ (150mm)
- Rear Top Focus For Wide Angle. New, Moves Rear Standard Forward on Rails
- Folded dimensions
  …7″x7″x3.3″ (excludes knobs)
- Lensboard dimensions
  …4″ x 4″ (101mm)
- Linhof/Wista adapters available

ポラロイド講習会レポート

畑　文夫

日時　8 月 10 日（土）　1～5 時
場所　日本ポラロイド（株）3 階会議室にて
出席　日本ポラロイド（株）　安藤部長、他
　　ゾーンシステム研究会　中島先生、菅野、小野、内田、松本、山本、古川、田中肇、石井、山下、藤枝、鈴木、岡崎、圓子、田中英、古谷津、北野、畑（記）　順不同

ポラロイドタイプ 55 フィルムの特性と使い方

（日本ポラロイド　安藤部長、　中島先生）

詳しくはホームページのデータシート参照。（英文・アクロバット必要）
http://www.polaroid.com/service/filmdatasheets/4_5/index.html

■　タイプ 665 とタイプ 55 の違い
・タイプ 665 はカセット中でネガとポジが分離しているがタイプ 55 は密着している。
・耐湿性などに求められる特性が異なるため、両者は別の工程で製造。
・タイプ 55 の有効期限は製造後 9 ヶ月。

■　フィルム保存
・冷凍保存は不可。（いちど現像液を凍結させると使用不能）
・冷蔵庫から出した後、2 時間程度常温に戻すこと。
・開封後はすぐに使い切ること。
・日本の夏のような高温多湿環境では、乾燥剤を入れた密閉容器（タッパーなど）に入れ、その日の内に現像すること。
　→湿気を吸うとネガとポジのゼラチンが貼り付き、封筒を引くことも出来なくなる。
　（岡崎氏の事故実例あり）

■　相反則不軌　色温度の影響など
・A. アダムスの著書によれば、相反則不軌は次の通り。（感度 ISO 20 設定）
　露出計指示　8 秒露光→　×2 倍（16 秒露光）
　〃　　16　→　×2.5
　〃　　32　→　×3
　〃　　64　→　×4

・タングステン光（3200K）では。1/3 絞り開ける。

■　現像条件と感度
・現像時の気温により現像時間を変える必要あり。
　（例：10℃以上 60 秒…24℃以上 20 秒）
　実用上は推奨時間＋10～15 秒程度が良い。但し、感度は不変。
　（現像時間で感度をコントロールする事は出来ない）
・0℃以下では使用しないこと。
・30℃を越える炎天下では使わない方がよい。

■　現像
・現像時はホルダーをカメラから外す。
・ホルダーを水平に持ち、フィルムを手前に「一気に」引き出すとムラが出来にくい。
（現像ローラー保護と称し、途中で止めてローラーを解除するのは無意味かつムラの原因。）
・封筒の引き剥がしも「一気に」行う。

■　ネガ洗浄

・洗浄キット（定価 5500 円）には 2 リットル容器、無水亜硫酸ナトリウム 440 グラム、フィルム保持枠などを含む。
・無水亜硫酸ﾅﾄﾘｳﾑを溶かすときは 40～50℃の温湯を 2 リットル準備し、18%溶液とする。
　　＝440／（440＋2000）
・ネガ洗浄時は 21℃程度に下げること。
・ネガ表面のヌルヌルは軽く指でこすると落ちる。
・液中には最大 72 時間浸漬可。
　2 リットル溶液で 100 枚程度は処理可能。
（濾過すればさらに使えるが、具体的な方法が不明）
・使い終わった溶液は廃棄し、新液を作り直す。
（つぎ足し不可・廃棄は下水で可）
・無水亜硫酸ナトリウムは写真材料店で入手可能。
・洗浄液を溜まり水で代用すると現像が進行するため、不可。

■　ネガのアーカイバル処理
（A. アダムスの著書による）

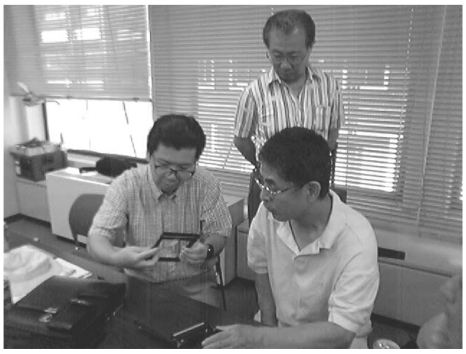
・ネガ洗浄（上記） → リンス → 酸性硬膜定着液で 3～4 分定着（迅速定着は不可） → 水洗 → ハイポ駆除＋セレニウムトナー（1 : 20）混合液　2～3 分処理 → リンス･水洗 → 界面活性剤（ドライウェルなど）処理 → 自然乾燥 → アーカイバル封筒保管

■　プリントのコーティング

・コート前に容器の縁でしごき、付けすぎないようにする。
・プリント上で一方向に数回塗る。

■　ホルダーの分解

・現像液漏れなどのトラブル時にホルダーを分解して清掃する。
・ローラーなどは湿らせた布で拭き取る。（シンナー不可）



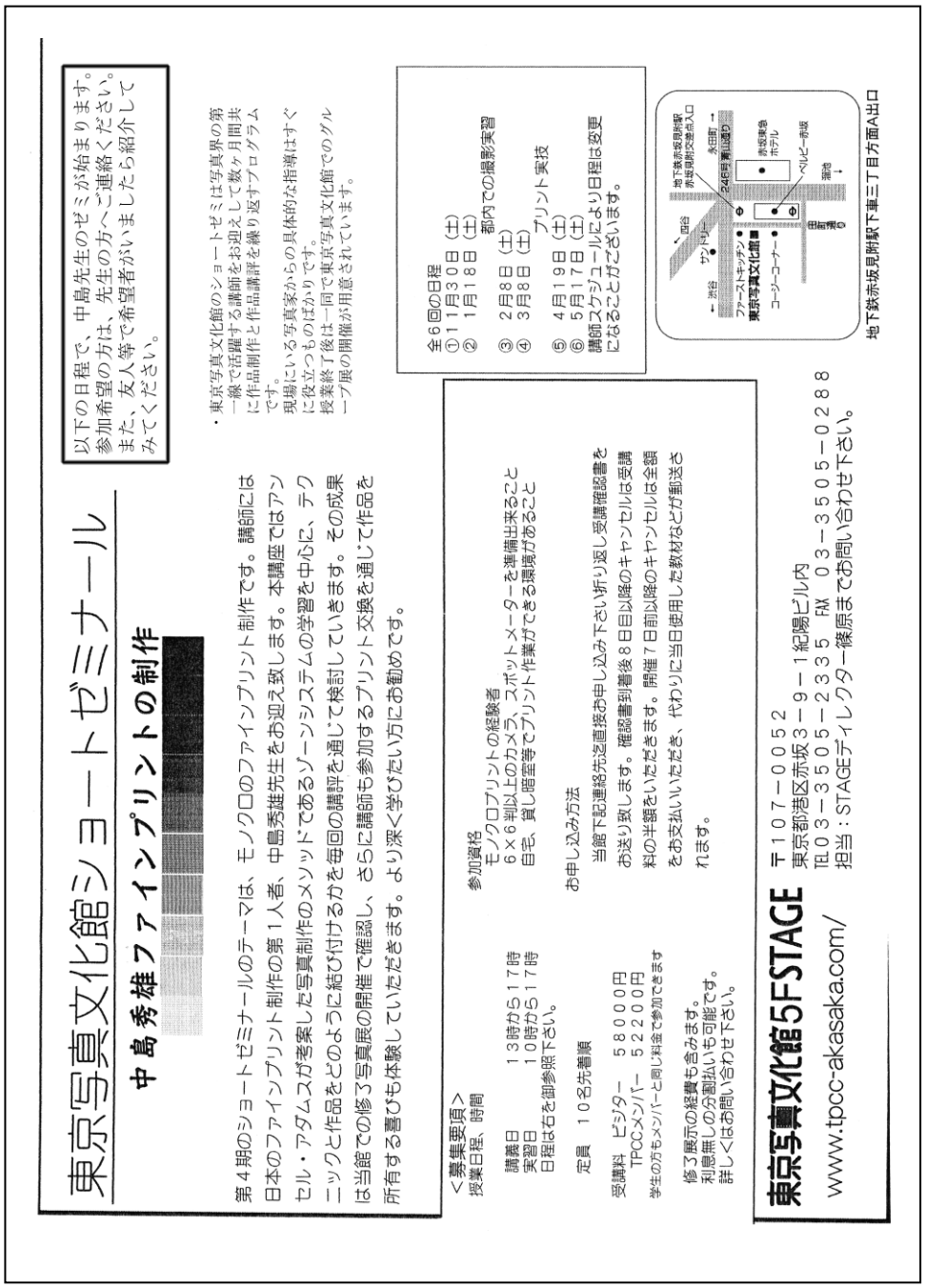
■　その他

・失敗プリント 20 枚で新品フィルム 1 本と交換する「セーフ＆セーブ・クーポン券」あり。
　後日会員に配布予定。
・フィルム箱の使用期限部を切り取ると、点数により景品と交換する「わくわくグッズプレゼント」あり（但し、期限は当年内）
・Wisner カメラは、銀一扱いで会員向け優待セールを予定。

Information

【トピックス】

1．中島先生のゾーンシステムワークショップ（東京写真文化館）パンフレットを掲載します。友人等希望者がいましたら御紹介ください。



東京写真文化館ショートゼミナール

中島秀雄ファインプリントの制作

以下の日程で、中島先生のゼミが始まります。参加希望の方は、先生の方へご連絡ください。また、友人等で希望者がいましたら紹介してみてください。

第４期のショートゼミナールのテーマは、モノクロのファインプリント制作です。講師には日本のファインプリント制作の第１人者、中島秀雄先生をお迎え致します。本講座ではアンセル・アダムスが考案した写真制作のメソッドであるゾーンシステムの学習を中心に、テクニックと作品をどのように結び付ける力を毎回の講評を通じて検討していきます。その成果は当館での修了写真展の開催で確認し、さらに講師も参加するプリント交換を通じて作品を所有する喜びも体験していただきます。より深く学びたい方にお勧めです。

・東京写真文化館のショートゼミは写真界の第一線で活躍する講師をお迎えして数ヶ月間共に作品制作と作品講評を繰り返すプログラムです。
現場にいる写真家からの具体的な指導はすぐに役立つものばかりです。
授業終了後は一同で東京写真文化館でのグループ展の開催が用意されています。

全６回の日程
①１１月３０日（土）
②　１月１８日（土）
　　都内での撮影実習
③　２月８日（土）
④　３月８日（土）
　　プリント実技
⑤　４月１９日（土）
⑥　５月１７日（土）
講師スケジュールにより日程は変更になることがございます。

<募集要項>
授業日程、時間

講義日　　１３時から１７時
実習日　　１０時から１７時
日程は右を御参照下さい。

定員　１０名先着順

受講料　ビジター　５８０００円
　TPCCメンバー　５２２００円
学生の方もメンバーと同じ料金で参加できます

修了展示の経費も含みます。
利息無しの分割払いも可能です。
詳しくはお問い合わせ下さい。

参加資格
モノクロプリントの経験者
６×６判以上のカメラ、スポットメーターを準備出来ること
自宅、貸し暗室等でプリント作業ができる環境があること

お申し込み方法
当館下記連絡先迄直接お申し込み下さい折り返し受講確認書をお送り致します。確認書到着後８日目以降のキャンセルは受講料の半額をいただきます。開催７日前以降のキャンセルは全額をお支払いいただき、代わりに当日使用した教材などが郵送されます。

東京写真文化館5FSTAGE
〒１０７－００５２
東京都港区赤坂３－９－１紀陽ビル内
℡０３－３５０５－２３３５　FAX　０３－３５０５－０２８８
担当：STAGEディレクター篠原までお問い合わせ下さい。
www.tpcc-akasaka.com/

Information

【売ります】

［中島秀雄］

・ライカＲ－３　ブラックボディー
（X接点不良、アクセサリシューでシンクロ可、ファインダプリズムメッキ少しハゲ）
４００００円

・アポ・シロナーＷ２１０ｍｍＦ5.6 新品同様
８ｘ１０用
イメージサークル：３５２ｍｍ
フィルター径：１００ｍｍ
重さ：９９０ｇ
シャッター：コパル＃３
２６００００円（新品価格 398000 円）

【原稿募集】

会員の皆様からの原稿をお待ちしています。

［以下原稿投稿に関するお願い項目です。すみませんがよろしくお願いします。］

１．写真原稿は、紛失事故防止のため、できるだけネガやポジは避け、プリントでお願いします。

２．今まで同様、手書き文章はスキャナーでパソコンへ入力できないので、原則として受け付けません。以下いずれかの方法にて投稿願います。
・ワープロやパソコンでプリントアウトしたもの、（スキャナーでパソコンへ入力します。）
・パソコンの電子メール
・ウィンドウズの Word2000
・text ファイル
（ちなみにこの会報は、ウィンドウズの Word2000 で作成しています。）
ただし、どうしても手書き文章しか投稿できない事情がある場合は、事前に連絡をいただくようお願いします。

３．イラストは手書きでも結構です。スキャナーで取り込みます。

パソコンの扱いが不慣れのため、時々ご迷惑をおかけするときがあるかと思いますので、その際はよろしく御指導ください。

［編集者］　荒井　崇